

喉を切り裂かれて殺された男の名前は、門田仁史かどたひとしと聞いた。

年齢は五十一歳。仕事でこの街に住むようになったのは、三ヶ月前。そんなことは、この男にカネで買われたデリヘル嬢のわたしは本人から聞いて知っていた。

そして、火曜の夜——正確には水曜の未明、午前零時から午前二時半までのあいだに、門田仁史は殺された。

「どうしてわたしが……?」

わたしは眼の前の男に尋ねた。

もうすぐ定年だろうか。髪は薄く、腹はやや出ている。ヨレヨレのスーツを着て、丸顔で、眉毛は下がり、いつもにこにここと笑っているように見える。が、その瞳の奥には鋭い光が宿り、常に相手の心を貫こうとしている……まぎれもない警察官の眼だ。

「ええと、嵯峨野麻美さん……ですね。一応、参考までに、みなさんの話を聞いているというわけでしてねえ。刑事というのも、因果な商売です」

男は、県警あらまきの荒卷刑事と名乗った。

そのはす向かいには、痩せてひよろ長い刑事が座っていた。髪を短く刈り上げて、眼も唇も細い男だ。所轄の港西署の糸居という名の刑事だった。まだ二十代前半——わたしと同じくらいの歳だろうか。「スーツに着られている」といった感じだった。

「ええと、嵯峨野さん、言っておくけれど、私らはあなたたちを売防違反でパクろうと思ってるわけじゃあないんですよ。そっちは……ご存じかも知れないが、生安の役目だね。こんなとき『縦割り行政』の良さをわかってもらえるんじゃないかなあ」

とぼけた調子で荒卷刑事は言った。

「確かに、わたしは門田さんには会ったことがあります」

「『会ったこと』ね。で、最後に会ったのはいつですか?」

「さあ……あんまり客の顔とか名前とか覚えられないから」

「亡くなる三週間前ですなあ。えーと、どうなってたっけ?」

荒卷刑事は老眼鏡をかけると手帳を眺めながら、はす向かいの糸居刑事に尋ねた。

「午後十一時から（ホテル・ポートサイド・ウエスト）で、百二十分コース、コスチュームは、パジャマ。オプションは、あの、その、えっと……せ、せ、『聖水プレイ』……です」

「ふむ、ということ、間違いないですか」

この荒巻という刑事、相当のタヌキ親父だ。全部知っているのだったら、はじめから訊かなければいいのに。

「門田さんは、こちらの常連さんだったようですね。ほぼ週に一回、多いときには二回、こちらの（ヘアヴァロン）を利用してました。しかし……いつも違う子と会っていた。『馴染み』で毎回指名するというほどの女性はいなかったようですね。そこがちよつと奇妙だと思いましてね」

「何が奇妙なんですか？」

わたしが訊くと、荒巻は年甲斐もなく恥ずかしそうに、少し薄くなりかけた頭をボールペンの尻で掻き始めた。

「いやあ、私はあんまりこのテの業界と縁遠くてねえ。しかし、これだけ頻繁に（ヘアヴァロン）を利用していたとなると、当然のことながらお目当てのご婦人がいた、と考えるのが筋だと考えられるんですが。しかし、亡くなった門田さんは——表現は悪いが——女の子を取っ替え引っ替えしていた……ように見える」

「そういうお客さんもいると思いますけど」

わたしは部屋を見回した。

ほんとうにテレビドラマに出てくると瓜二つな「取調室」だった。無味乾燥なコンクリートの箱。申し訳程度に壁に開けられた窓には鉄格子。否応なく「おまえは取り調べられているんだぞ」と威圧してくる一種の拷問部屋だ。

「あなたはこちらの（ヘアヴァロン）に入って、まだ日が浅いそうですね」
どうせすでに裏付けが取られているに違いない。わたしはうなずいた。

「先月のはじめからです。その前にいたのは……」

「隣の市の（ミルキー・ハウス）でしたな。どうしてお辞めに？」

やっぱり、思った通りだ。すでに調べがついているじゃないか。

「ギヤラがよくなかったからです。それと、門田さんが亡くなったことと、何か関

係があるんですか？」

「わかりません。ただ、門田さんは、これを持っていた」

荒巻刑事は、小さなビニール袋に入った紙片を取り出してかざした。

はつとした。間違いない。〈ヘアヴァロン〉の名刺……兼サービス券。次回からは二千円引になる。

「わたしの……ですか？」

荒巻刑事は、渋面を作ったまま、首を振った。

「ミサトさんのものです。日付は、事件のあった夜になっています」

「ミサトの？」

わたしは思わず立ち上がった。

ミサトはかなり変わったデリヘル嬢だった。

わたしとほとんど同じ時期に、ちょうどわたしの隣の「待機所」に入ってきたからだ。

「待機所」とは、デリヘル嬢一人一人にあてがわれている「個室」だが、部屋とは名ばかりの、パーティションで区切られた三畳ほどの空間だ。

わたしになかなか呼び出しがかからずにお茶つ引きの退屈地獄で狂い死にしそうになっていたときにも、ミサトには頻繁に呼び出しがかかって、仕事に出かける物音がよく聞こえた。きつと、すぐにいい男を捕まえたのだろう。もしかして、前のお店からの馴染み客なのかもしれない。

ミサトがデリバリー・ヘルス〈ヘアヴァロン〉に入店して、二週間ほどたった頃だろうか。彼女とはじめて言葉を交わす機会があった。

単に、煙草の火を借りようと思ったただけなのだが。

「ごめんさい。わたし、吸わないから」

妙に丁寧な口調。笑顔まで見せている。ふつう、フーズクで働いている女の子は、たいてい同業者に対して親しげな態度を見せることはない。なぜなら、相手はみんなライヴァルだから。

確かに、ミサトのルックスはいい。わたしと同様、二十代前半というところ。ま

さか、二十歳前ということはないだろうけど、幼く見える。おっぱいは、たぶんCカップ。唯一この点だけは、わたしが勝っているかもしれない。

でも、その日をきつかけに、何度か会話を交わすようになった。ミサトは、ちょっとあやうい感じの「ホントにこのコ、風俗嬢？」と思わせるような、独特の不思議な雰囲気を出していた。そこが、男を惹き付けるのだろう。決して演じているのではなく、そんな空気がごく自然に出てしまうようだ。わたしには真似をしようと思っても決して無理だ。

そんなミサトが包丁で門田の首を真一文字に切り裂いて殺す光景なんて、想像できはるはずがなかった。

「あの夜、ミサトさんは門田さんに呼ばれます。ドライバーさんの確認も取れている。あなたたちは、いつもは『早番』なんですわね。しかし、ミサトさんは夜十時頃に門田さんから指名を受けて、出かけてますな。以前にも、時間外の指名に出動していることが、二度は確認されています」

わたしは少し考えてから言った。

「『早番』でも『遅番』でも、誰だつて時間を変更して働く日もあるし……それに、たぶん門田さんはミサトにとつて『いい客』だったんじゃないですか？ でも、もしも常連さんなら、殺す意味ないじゃないですか」

ミサトから直接、具体的に「門田」という名前を聞いたことはない。けれど、そんな男から何度も指名を受けていることは知っていた。

「それが、そうとも限らない。いずれわかることですが、門田さんは、あなた方の同業者の社長だったんですよ。この街で新規開店を計画していた。まず考えられるのは「アヴァロン」勤務の女性たちを調べて、新規開店する自分の店に引き抜く、ということですね。所謂『スカウト行為』というんですかね。何か、ミサトさんから聞いてませんかね」

「そういえば……聞いたことがあるような、ないような……」

ウソだった。確かに、ミサトは門田社長から引き抜きを誘いをしきりに受けていたらしい。もちろん「アヴァロン」よりもいいギャンブルが提示されたのだろう。ふつ

うのフーズク嬢が、おカネ以外の何のために、体を張って見知らぬ男に抱かれることがあるだろうか？

「ミサトさんは確かに容疑者の一人です。が、自分をスカウトして、好条件を提示してきた相手を殺す理由がない。よほど生理的に嫌悪感を催すような相手だったとしても、あんなに恨みのこもった殺し方をするとは考えにくい」

「恨みのこもった……？」

「無難なものだけ、お見せしましょうか」

荒巻刑事は、糸居刑事に合図した。糸居刑事は机に置かれたファイルを取り出し、何ページかめくり、広げてわたしに突き出した。

殺人現場の写真だった。

うつ伏せに倒れているのが、門田なのだろう。その首の辺りから地面の広い範囲がどす黒くなっている。切り裂かれた喉から吹き出た血潮だった。

わたしは眼を背けた。

火曜日の午後九時四十二分、〈ヘアヴァロン〉に電話が入った。門田からだった。

すでに店長は帰宅後で、電話に出たのはシンスケ君だった。門田はミサトを指名し、「今すぐに」と告げた。従業員のシンスケ君——びっくりするほどの美少年に見えるが、年齢不詳のゲイで、女の子たちの世話役として働いている——も店長も、門田が同業者らしい、ということには気づいていた。そのため「早番のミサトは帰宅したので代わりの子を」と言ったが、門田は高圧的な態度で執拗にミサトを呼ぶように繰り返した。しかたなく、帰宅の支度をしていたミサトが、いつものシティホテル〈ホテル・ポートサイド・ウエスト〉へと派遣された。

そのときの電話でのやりとりの様子は、待機所にいたわたしの耳にも聞こえていた。わたしは指名を待つて帰宅せずに居残りをしていた。

ミサトが〈ヘアヴァロン〉に戻ってきたのは日付が変わった午前十二時四十分頃だったという。

午前二時四十二分。一一〇番通報があつた。犬の散歩をしていた三十代男性から。「いずみ台公園」に人が血を流して倒れている、と。

警察と救急車が現場に到着したのが午前三時少し前。

門田仁史はすでに死亡していた。

死因は、出血多量による失血死。

門田仁史は、喉を鋭利な刃物で真一文字に掻き切られていた。ほぼ即死と思われる。死亡推定時刻は、午前零時三十分から午前二時半まで。凶器はまだ見つかっていない。

「形式的な質問ですがね、水曜の零時半から二時半までのあいだ、どこにおられましたか？」

「やっぱり来たか、と思った。どうせ調べてはついているはずなのに。」

「確か、日付が変わった頃、呼び出しがあつて、お客さんのところに行つてました。

ドライバーは齋木さんです」

「間違いありません。えーと、どうだったっけ？」

「またしても荒巻刑事は若い糸居刑事に振つた。」

「ハイ、えー『アサミ』さんは、X区の『原田』という人の『自宅派遣』で百二十分コース。オプションは、長袖セーラー服。齋木氏の運転で〈ヘアヴァロン〉を出たのが午前零時三分。お客さんの自宅に着いたのが午前零時二十五分頃。〈ヘアヴァロン〉に戻ってきたのが午前二時四十四分、となつてます」

「あなたにはアリバイがある……ということになる」

「アリバイ？　じゃ、わたし、疑われてたんですか？」

「それがこちらの商売でしてねえ。この『原田』さんというお客さんは、あなたをこれまで三度、指名したことがありますね。ま、『常連さん』といつていいでしょうな」

ウソをついてもムダなので、わたしはうなずいた。そこで、荒巻刑事は一度ため息をつき、ぱたん、と手帳を閉じた。

「前にも一度、おたくで事件があつたんですよ。ご存じないでしょうが。あのおときみたいに、オクラにはしませんからね」

荒巻刑事は言つて、わたしのためにわざわざ取調室のドアを開けた。

わたしはちよつとだけ荒巻刑事に頭を下げて、取調室を出た。

わたしは警察署の建物を出ると、携帯電話を取り出した。仕事用ではなく、自分のもの。相手は姉だった。姉は、わたしが警察に呼ばれたことを、ひどく心配していた。その様子は、かえってこつちが心配してしまいうくらいだった。姉——たった一人の家族。姉は、わたしの仕事の内容を知っていた。これ以上、姉を心配させるわけにいかない。

八回目のコールで姉が電話に出た。きつと今までベッドに潜り込んでいたのだから。

「寝てた？」

姉は「病気」ではない。人は「心の病」と呼ぶかもしれない。けれど、本人は病気だとは思っていないし、わたしも思っていない。病院にも行っていない。

「うん。で、そつちはどうだった？ 留置所とかに入れられるの？」

わたしは笑い出した。相変わらず心配性な姉だ。

「そんなんだつたら電話できるはずじゃないじゃん。平気平気。ただの事情聴取」

わたしは姉に、姉に荒巻刑事から聞いた事件について説明した。

「大丈夫だから、寝ていいよ」

わたしは姉に言っつて、電話を切った。

「ミサトちゃん、わたしたち、みんなあんたの味方だからね」

シンスケ君が身を乗り出すと、向かいに座ったミサトは、力なくうなずいた。その目の前のオレンジジュースは、とうに氷が溶けてしまっている。

わたしたちのいるのは、某ファミリールレストラン。〈アヴァロン〉から離れていて、それでも駅から近いので、わたしやミサトやリサさん、それにシンスケ君が暇なときは、仕事終わりによく利用していた。二十四時間営業で、ドリンク・バーもあるから、何時間でも、いたただけいられるし、喋りたいだけ喋ることができた。

「ねえミサト、そんなに暗い顔しないで。ミサトに似合わないよ」

わたしはバナナプリン・パフェをフォークでつつきながら言った。

「うん……ごめんね、アサミさん」

「謝ることないよ」

「せやけど……」

口を挟んだのはリサさんだった。リサさんは、〈アヴァロン〉の古株らしい。ベテランでたくさんの常連客を持っているとのことだ。女のわたしから見てもすごく美人で、肌もツヤツヤ。たぶん——わたしの想像だけ——ひよつとしたら、もう四十近い可能性もある。なのに、二十代前半から三十代後半までのいくつにでも見えた。お客によつて、メイクや衣装を変えるそうだ。リサさんは、わたしたち〈アヴァロン〉の早番の女の子たちにとっては、いちばん信頼されているお姉さんのような存在だ。

「警察がこんだけミサト疑うてんのはワケあんのとちゃうか？ 門田、やったっけ、あの男となんかトラブつとつたんとちゃうん？」

リサさんはメガ・ストロベリー・パフェをほおばりながら言った。

「そんなことないです。確かに、あの門田さんからは、新規開店するうちの店に来い、つてしつこく誘われてました。それはホントです。でも……殺すなんて……」

「せやな。ホンマにそんなええ条件やったら、とつとと移つてまえば、ええだけのことやし……。あの門田いう男、会ったことあらへんけど、そんなイヤな奴やった？」

「それほどでも……でも、すごくしつこかったのは確かです。でもNG行為をやったりはしなかつたです」

うつむいたまま、ミサトは答えた。

わたしは口を挟んだ。

「じゃあ、どうしてあつちに移籍しなかつたの？ 〈アヴァロン〉よりいいギヤラだったんでしょ？ 行けばよかつたじゃん」

「だって、こつちには、アサミさんとかリサさんとか、シンスケ君とか、みんなみたいな友だちがいるから……」

そう言つてミサトは少し笑つた。そのはかなげな笑みが、オトコという生き物を惹き付けるのだ。それにミサト自身は気づいているのだろうか。

「ねえ、ちよつと整理しましょ」

アイスコーヒーのおかわりを持つてきたシンスケ君が言った。

「時系列に沿つて、事件を整理するのよ」

「ホンマの『生理』知らんくせに」

からかうようにリサさんが茶々を入れた。シンスケ君は、至つて真面目だった。「刑事から聞いた話は、みんな同じだと思ふのよ」

シンスケ君がトートバッグから取り出したのはルーズリーフだった。

「いい？ まず、ミサトちゃんが門田から呼ばれたのが、火曜の午後九時四十二分……」

シンスケ君は、手帳を取り出して一ページちぎると、ボールペンでさらさらと事件のあつた夜の出来事を書き始めた。

火曜

午後九時四十二分 アヴァロンに門田から電話。

午後十時五分頃 ミサトとシンスケ、〈ホテル・ポートサイド・ウエスト〉着。

水曜

午前零時十四分 ミサトから連絡。

午前零時二十五分頃 シンスケ、ホテル前に着。ミサトと一緒に〈アヴァロン〉へ戻る。

午前零時四十分頃 ミサトとシンスケ、〈アヴァロン〉着。

午前一時五分頃 ミサトが〈アヴァロン〉を出る。

午前一時十一分 ミサトの自宅方面へ向かう最終電車発。

午前二時四十二分 〈いずみ台公園〉で門田の遺体発見の一一〇番通報。

「どう考えても、ミサトちゃんが門田さんを殺す時間の余裕なんて……あり得ないわ」

シンスケ君が深刻げに眉間に皺を寄せた。

「そうやろか？」

リサさんはすでにメガ・ストロベリー・パフェを四分の三、制覇していた。

「ミサトが帰つて来てから門田の屍体が見つかるまで二時間もあるやん」

「ちよつとお、ミサトはあたしと一緒にちゃんと帰つてきたんだからね。あたしは

それから、ミサトちゃんとおしゃべりして、一時過ぎに『あ、終電なくなる』って、出てったんだから」

シンスケ君が力強く言ったが、リサさんはグラスの底のアイスクリームをスプーンでこそげ取ることのほうが大事のようだった。

「あんたが、ミサトをかばってなければ、の話やけどな」

わたしはフォークを置いて、じつとリサさんを見つめた。

「リサさん、何か知ってるの？」

するとリサさんは、強い強い視線をわたしに向けた。

「以前にもあつてん、事件が。客やのうて、〈アヴァロン〉のコが殺される事件があつたんや。あの荒巻いう刑事もそんとき来たわ。で、そのとき、事件を解決しよう思うた子がおつた。結果的に確かに『答え』は出たわ……警察は今でも何も知らんけどな。けど、誰も幸せになれへんかった。だから……やめたほうがええねん。へんにイラわんほうが、みんなのためや、思うけどな」

「リサさんは、ミサトが捕まってもいいっていうの？」

わたしが声を上げると、リサさんは静かに頭を振った。

「警察かてアホやない。うちらが今考えたことくらい、ちゃんと調べてウラ取つてるわ。ミサトが捕まるようなことは絶対あらへん」

しばし、みんなは黙り込んだ。やがて、シンスケ君が言った。

「確かに、今回の事件と〈アヴァロン〉が関係あると決まったわけじゃないわよね。

全然知らないところで、知らない人間が殺した可能性のほうが高い。例えば、同業他社とか。前の事件もそうだったけど、『触らぬ神に祟りなし』よね」

シンスケ君は言った。

「ごめんさい、みんな。わたしのために余計な心配かけてしまつて……わたし……」

「何も言わんでもええねん」

うつむくミサトに向かつて、リサさんが言った。

わたしは、パフェの端つこに残つたバナナにフォークを突き刺した。

「ミサトは助かるかもしれないけど……でも、事件は解決しないわよね」

わたしが言うと、パフェを食べ尽くしたりサさんが、いつそう強い視線をわたしに向けた。

「なんで、うちらが解決せなあかん？」

わたしは黙り込んだ。バナナとホイップクリームを一緒に口にほおぼった。甘かった。

そのときに、わたしは気づいた。

リサさんが、今度の事件について何か隠しているということ。

事務室には珍しく齋木さんしかいなかった。わたしは齋木さんの腕を引っ張って、無理矢理、ミサトの待機所へ引きずり込んだ。

齋木さんは、もう五十過ぎのダンディなおじさま。髪には白いものが目立つが、まるで「執事」のようなカッコいい人だ。どうして、こんな人が長いあいだ〈アヴアロン〉のような風俗店で働いているのか、不思議だった——けれど、もちろん、その質問を本人にぶつけたことはない。

「ちよつと何を……」

齋木さんは、怪訝な顔つきを、わたしとミサトを交互に向けた。

「私はここの従業員なんだ。大事な『商品』に手を付けるわけにいかないんだよ」
冗談めかして言いながらも、齋木さんの表情から心配のいろは消えなかった。

「今度の事件のことなだけど……」

わたしはミサトの肩を小突いた。もとはと言えば、ミサトのほうからわたしに相談を持ちかけてきたのだ。

「あの……事件について、何か、齋木さんは……新しいことを聞いている？」

齋木さんは大袈裟にため息をついた。

「大丈夫だよ、警察はミサトちゃんのことを、疑ってはいない」

「え？ ホント？ でも、なんかうちの周りとか、誰かいつも見張ってるような気がしてるんですけど……」

ミサトが言った。

「それはそうだろう。警察側は、まだ完全にシロと確証を得たわけじゃなさそうだ。」

他に容疑者は浮かんでないみたいだから、ミサトちゃんの身辺調査は続いてるんだろう」

「さすが齋木さん、いろんなことに詳しいわね」

わたしは言った。

「心配する必要はないんだよ、二人とも。ミサトちゃんにはアリバイがある。それに、きみにだって」

齋木さんはわたしを指さした。

「アサミちゃんをお客さんの家に送迎したのは私だ。我々みんなそろってアリバイが成立する」

確かにそのとおりだ。

あの日、わたしを夜遅くに指名してきた「原田」は、わたしの「常連」のような人物だ。「原田」からの呼び出しを待ったために、給料の出ない残業をしていたのだ。

「ミサトは心配しすぎなんだって」

わたしは言ったが、まだミサトは浮かない顔をしていた。

「でも……でも、実際にあの人は死んじゃったんでしょ。あんまり……っていうか、全然いい人じゃなかったし、正直、悲しいとも思わないけど……納得がいかないカンジがする」

ミサトらしい心の持ちようかもしれない。もしもわたしがミサトの立場だったら、絶対にあり得ない。ミサトのまつすぐさに胸を衝かれるような気分になった。

「そうだね、人の命がかかっている……」

静かに齋木さんは言った。

翌日、わたしは公休日だったけれど、偶然にもミサトも休みだった。頼りになる齋木さんもまた、わたしのわがままを聞いて、わざわざ休みを取ってくれた。

ミサトの運転する軽自動車で、まずは被害者の門田仁史がこの街で住んでいたマンションへ向かった。

「へえ、大きなところに住んでるんだ。家賃、いくらだろう」

路上駐車した車のなかで、わたしは言った。

「家賃つて……分譲マンションでしょ？」

運転席のミサトは冷静に観察しているようだった。

そのときだった。助手席側の窓に影が近づいた。わたしは妙に緊張した。一瞬遅れて、サイド・ウィンドウがコツコツと指先で叩かれる音がした。

刑事だった——曲線でできた顔の初老の荒巻刑事。

「いやあ、奇遇ですな。どうしてまたあなた方がここに？」

荒巻刑事は一人のようだった。

「亡くなった人の家を見てみたくて……」

ミサトが少々舌足らずの口調で言った。

「ほほう、これは殊勝なお気持ち……と言いたいが、あなたたちは、事件の関係者だ。勝手にこんなところに来てもらっては困るなあ」

荒巻刑事は薄くなった頭を掻いた。

すべてをはぐらかすような荒巻刑事に、なぜかわたしはいらだちを覚えた。

「人聞きの悪いこと言わないでよ。べつに容疑者じゃないんでしょ？ だって、みんなアリバイあるんだから」

「刑事さんにお訊きしたいんですが……」

後部座席から口を挟んだのは齋木さんだった。

「おやおや、あなたもご一緒ですか。無論、答えられることと答えられないことがありますよ」

どうやら、荒巻刑事は齋木さんには小さからぬ好意のような感情を持っているようだ。

「私が理解できないのは、なぜ門田さんは、自宅からかなり離れた公園へ行つたのか、ということなんです」

齋木さんの質問に、荒巻刑事は曲線で構成された顔をいつそう丸くした。

「ずいぶんと今度の事件にご執心ですな。が……それが我々にも疑問なんですよ。門田氏が、あなた——ミサトさんとお会いになったあと、ほどなくして車で出かけている。ホテルから、車に乗って公園へほぼ直行したと思われる。途中のNシステムにも門田氏の車の映像が捉えられています。ではなぜ、門田氏は、あの公園に行か

なければならなかったのか？ 誰から呼び出されたのか？ その呼び出した相手に殺された、というのが当然の推測ですわな」

「当然、門田さんの携帯電話の着信記録は調べたんでしょね」

齋木さんは冷静に尋ねた。まるで、小説に出てくる探偵みたいだ。

「無論です。以下は、本来、部外者に聴かせる話じゃない。だから、私のただの独り言だと思って下さい。〈ホテル・ポートサイド・ウエスト〉をチェック・アウトしたのが、午前零時三十一分。その直後、三十三分に、着信がありました。相手は……公衆電話。四十二分には、門田氏がホテルの地下駐車場から出庫したという記録が残っています。が、ホテルから〈いずみ台公園〉まで、深夜とはいえ、車で二十分はかかる。すると、門田氏が公園に到着したのは早くても午前零時五十分頃だと思われる。公園の駐車場はすでに閉鎖されており、門田氏のオーディオは近くに路上駐車されていました。その車は、遺体発見後すぐに見つかりました……おっと、こりゃ、完全にしゃべり過ぎですなあ」

人懐っこそうな顔つきで荒巻刑事は笑った。が、この笑顔に騙されてはいけない。相手は警察官だ。

「公衆電話から何者かに〈いずみ台公園〉に呼び出された、ということですか？」
わたしは訊いた。荒巻刑事はうなずいた。

「当然、そう思われます。前々から公園で会うことを約束していたのではない。もっとも、仮にそうだとしても……えーと、その、人と会う前にご婦人と一時を過ぐすというのは、いささか理解に苦しむところですね」

「今どき、公衆電話か……」

齋木さんが独りごちるように言った。

「ホテルの監視カメラには、何か映ってたんですか？」

ミサトが静かに質問した。

「ほほう、鋭い。確かにあなた自身が、あなたの供述通りに部屋に入って、部屋から出て行く姿が映っていましたよ。そして、少し遅れて出て行く門田さんの姿も。地下駐車場の監視カメラも確認済みです。怪しい人物は誰一人映っていません。門田さんは誰かに拉致されて公園まで連れて行かれたと思っ

います。ご自身で車を運転し、ホテルを出た。あなたたちがいくら調べたところで、我々警察にはかなわんのです。ですから、これ以上は嘴をはさまないほうがいい」
もう荒巻刑事の両眼は笑っていなかった。

「娘さんは知ってたんですか？」

わたしは身を乗り出した。

「は？ 娘さんというと……門田氏の？」

「あの人の娘さんは、お父さんが風俗業の社長をやっていたことを、知ってたんですか？」

荒巻刑事は、口を一文字につぐんでじつとわたしを見た。

「興味深いことをおっしゃる人だ。娘さんはまだ七歳。無論、門田氏の仕事を理解しているはずはない。ちなみに、奥さんは二十六歳。門田氏とはずいぶんと歳の離れた若い奥さんだ。夫婦仲は、まあ円満とっていいでしょうな。ちなみに、奥さんは、かつて門田氏の経営していたお店の従業員でした。おっと……また話し過ぎってしまった」

荒巻刑事は感情を込めずに言った。

わたしの「客」として門田の相手をしたとき、妻と娘がいるということは聞いていた。けれど、その「妻」がわたしとさして歳が変わらない——しかも、かつてはわたしの同業者だった——ことが、わたしを動揺させていた。

何かが振動する気配——わたしの携帯電話だ。仕事用に持たされているのではなく、私物のほうだった。

不吉な予感——そんなものばかり、いつもの中する。姉からのメールだった。

「ごめん、お姉ちゃんが、ちよつと具合が悪いみたい。すぐ戻らないと……」

「あ、お姉さんと住んでるんだ。風邪でも引いたの？」

ミサトが心配げな表情をわたしに向けた。わたしは彼女から視線を外し、携帯電話をバッグに収めた。

「風邪っていうか……もう調子がよくなると思ってたのに……」

「駅まで送るね。じゃ、刑事さん、さよなら」

ミサトは言うや否や、サイド・ブレーキを外してアクセルを踏み込んだ。意外そ

うな荒巻刑事の顔が遠ざかっていく。

「わたしにもきょうだいがいるの。弟だけど。家族って大事にしないとね」

ミサトは、意外に根性のある子かもしれない、とわたしは思った。

姉のマンションに着いたとき、思った通り、姉はベッドのなかだった。昼間だというのに、カーテンは閉め切られている。

「ごめん、せつかくの休み、台無しにしちゃったなあ。貧血で倒れちゃって……ちよつと、右の手首捻ったかも……」

ベッドの上に腰掛けた姉は言った。わたしはすぐに湿布を貼り、包帯を巻いてあげた。姉が病院に行かない理由はもう一つある。それは、病院嫌いだということ。

「右でよかったじゃん、サウスポーなんだから」

姉は、わたしの知らないようなつらい思いをしたことがあるらしい。詳細を訊いたことはない。が、わたしには容易に想像できる。わたしが体験したつらさと、姉のつらさを比較したところで、意味はない。お互いに自らの苦しみを嘆き合ったところで、何も生まれはしないし、何も解決にはならないことをわたしたちは知っていた。

わたしは、今日のできごとを、そして考えたことをかいつまんで姉に話した。誰かに話さずにいられなかった。姉は黙って聞いたままだった。

「どう思う？」

わたしは訊いた。

「どうって、何が？」

「ミサトのこと。あの子、間違いなく何か背負ってるよ」

「それは同じじゃん。リサさんだっけ？ とってもいい先輩の人だって言ってたけどさ、あの人だって何かを背負ってるんだよ。何も背負ってない人なんていない……」

「そうだけど……例えば、ミサトがマンションを出たあと、すぐに公衆電話からかけて……」

「ちよつとストップ。ミサトちゃんが殺したって言いたいなの？」

「可能性の一つとして……」

「失格だなあ。疑問だらけ。マンションの近くに公衆電話はあるのか調べた？ 仮に公衆電話があつたとして、どうしてわざわざかけ直さないといけなかったのか。それに、ミサトちゃんは、ドライバーさん——シンスケ君だつけ——と一緒にすぐに事務所に戻った。つまり鉄壁のアリバイがある。矛盾だらけでお話にならない。そもそも、殺人の『動機』がない。ミサトちゃんは、絶対に犯人ではあり得ない」
姉は冷たく言い放った。

「じゃあ……リサさんも言つてたけど、シンスケ君が、ミサトをかばつてるって可能性は？」

「……なきにしもあらず。だけど、理由がわからない」

わたしは考え込んだ。さすが、姉はわたしと違って頭の回転が速い。

「〈アヴァロン〉の人が関わってる、ってストーリーを考えること自体、やめたほうがいいと思う……ごめん、疲れちゃったな。休ませて」

姉は静かに言い、ベッドに横たわった。

やっぱり、わたしはいつまでも姉には敵わない。

その晩は、姉の部屋の床にマットレスを敷いて、一緒に寝た。姉はあきれ顔だったけれど、睡眠導入剤を二人して同時に飲んで、たぶん同時に眠りに就いた。

「あのお……すみません」

駅舎から出ると、背後からおどおどとした男の声が聞こえた。わたしは無視して足早に〈アヴァロン〉の入っているビルへと向かった。

ナンパするなら、もつと自信を持ってやれよ。どっちにしろ、そんなバカ男について行くことなんか絶対じゃないけれど。

「アサミ……嵯峨野さん。僕です。あの……コーサイシヨのイトイです」

コーサイシヨ——港西署。はじめて音と文字が一致した。わたしは振り返った。港西署の取調室で、所在なさそうにしていた若い刑事がそこには立っていた。

「何か訊きたいことでもあるの？ こないだ、全部話したんだけど」

わたしは虚勢を張って、糸居刑事に胸を突き出した。

「荒巻さんから……」

「任意の出頭？ 任意なら、わたしはお断りします」

「違うんですよ、それが。荒卷さんの許に——リサさん、でしたね、源氏名が——彼女から連絡がありまして、署ではなくて……公園へ来ていただけないか、と……」

「リサさんが？ 公園つてどこの……」

言いかけて、わかった。門田仁史の殺害現場……へいずみ台公園だ。

『任意同行』という話でもないんです。だから、我々としても強制力はまったくないんですが、もしもよろしければ……ええと、来ていただけると……」

「荒卷刑事に怒られない、つてことね」

「はあ……そうです……」

糸居刑事は今にも泣き出しそうな顔になっていた。

「いいですよ」

「助かります」

心底、ほっとした様子で糸居刑事は言った。

門田仁史が殺害された現場である〈へいずみ台公園〉の、ユリ園の脇の小径。そこにわたしたちはいた。

荒卷刑事をはじめ、リサさん、シンスケ君、齋木さん、ミサト、それに店長までがいた。

「いやあ、お忙しいところ、集まっていたでいて申し訳ない」

一向に申し訳なくないような表情で、丸顔の荒卷刑事が言った。

「いいですかね。こつちには仕事があるんですよ——サービス業が」

店長がいらだった様子で言った。

思えば、店長と顔を合わせるのは久しぶりだった。いつ見ても悪相だ。その顔は、殺された門田を思わせる。同業者は似たような顔になるのか。それとも、似たような悪相の人間が風俗店を営業したがるのか。

その隣のシンスケ君は、そわそわと落ち着けない様子だった。いつぼうで、齋木さんは日頃とまったく変わらなず冷静な面持ちだった。ミサトはというと、やはり動揺しているのか、辺りをきよろきよろと見回している。

「ここで、門田仁史氏は殺された。鋭利な刃物で背後から喉を真一文字に切り裂かれ、うつ伏せに倒れた。もう血痕やらその他の痕跡は残ってませんがね」

「背後から？」

わたしは尋ねた。

「そうです。考えてもみて下さい。正面からいきなり相手の喉を切れますかね？鑑識とも一致した意見は、犯人は、被害者が油断している隙に背後から片手で口を押さえ、片手で喉を切った、ということです。犯人は軍手と思われるものをしていました。その痕跡がわずかに門田氏の左頬の皮膚に付着していました。被害者の身長は約百六十三センチ。犯人はやや門田氏よりも背が高いと推測されますな」

「このなかで百六十三センチより高いいうたら……」

リサさんが言いかけた。

「おい、バカなことを言うんじゃない！」

店長が怒鳴った。確かに、店長の身長は約百七十五センチ、つまり被害者の門田よりも十センチ以上高い。

荒巻刑事は言った。

「そうですね。あなたは売れっ子のミサトさんが、同業者である門田氏に引き抜かれそうになっていたことに気づいていた。〈アヴァロン〉としては大きな損失だ」

「バカバカしい！ 人を殺すなんて……！ おい、刑事さんに何を吹き込んだ！」

店長はリサさんに向かって怒鳴りつけた。リサさんというと、まったく表情を変えずに門田が倒れていた場所を見つめていた。

荒巻刑事は店長をにらみつけた。

「あなたには、門田氏死亡推定時刻のアリバイはありませんな」

「証拠はあるのか！ 俺が殺したという証拠は！」

「いいえ、ありません」

あつげらさんと荒巻刑事は言った。

「それに私は、あなたが容疑者だとは一言も言ってませんよ。それとも、何かやましいことでもあるんですかねえ」

店長は口ごもった。

そのとき、それまで無言だった齋木さんが一歩、荒巻刑事に近づいた。

「ここに我々を呼んだのは、刑事さん、あなたが犯人を解明したからではないんですね」

「いやあ、面目ない。そのとおりです。どうしても事件についてお話ししたいという方がおられて……この現場にお呼び立てしたというわけです」

「リサさんが……?」

わたしはリサさんの顔を覗き込んだ。けれど、リサさんはやはり地面を見つめたままだった。こんなに落ち込んだ様子のリサさんを見るのははじめてだった。

「ホンマは刑事さんたちに言うつもりあれへんかったけど……どうしても耐えられへんかった。門田仁史という男は、ホンマにめつちや最低最悪の男やった。もしも世の中に『死んでもええ人間』がおるんやったら、『そいつは門田や』思うたわ」

誰も言葉を発しなかった。

「けどな、どんなに最悪の男やろうと、人をホンマに殺してええわけないやろ。調べれば調べるほど『この門田いうやつ、最悪のクズ野郎や』思うたけど……それでも、門田には奥さんもおったし、なあんも知らへん小さな子がおった」

しばらく誰も口を開かなかった。どこか遠くでさかりのついた野良猫がうめくような声を上げていた。

「ミサトから門田の話聞いて、あいつのこと調べたんや。簡単やったわ。戸籍謄本も住民票も楽勝でゲットできたし」

「何言い出すんだ、おまえは」

店長が声を荒げたが、リサさんは無視して続けた。

「門田がこの街に来る前のこと、ようわかったわ。今でも営業しとるホテルや箱ヘルのこと……それに、前の奥さんのこと。その人とのあいだの子どものこと」

「子ども……?」

わたしはあえぐようにつぶやいた。

「せや。門田には他に子どもがおった。前の奥さんが引き取って、門田は親権を放棄した。でも、その奥さんも四、五年前に亡くなってもうた。まだ四十代やった。ホンマ、神様は間違うとるわ。なんで門田みたいな奴をこの世に産み落とすん?

許せへんかった。門田の娘さんほもつともつと許せへんかったやろうけど」

「門田の娘……そうか、そういうことだったのか……」

齋木さんがつぶやいた。そして、がつくりと肩を落とした。

齋木さんを一瞥すると、荒巻刑事がリサさんに言った。

「つまり……あなたはこう言いたいんですな。門田仁史という男のこれまでの所業を許すことができず、義憤に駆られて門田氏を殺した、と。確かに、あなたには事件当日のアリバイはない。あなたの身長は約百六十センチ程度とお見受けするが、高いヒールの靴を履けば、百六十三センチを越えるかもしれない」

「ウソでしょ！」

シンイチ君が裏返った声を上げた。

公園が静まりかえった。また、どこからか野良猫の鳴咽のような声が聞こえた。

荒巻刑事は言った。

「そうです。しかし……」

「またそういうウソをつくのか……」

齋木さんが静かな声で言った。

「何言うてんねん！ ウソやない！ わたしにはアリバイはないし、動機はある。身長の問題もクリアしとる。何かおかしい？」

わたしの視界の片隅で、ミサトが泣き崩れるのが見えた。

「おかしいですなあ。大いにおかしい」

荒巻刑事は言いながら、齋木さんに近づいた。

「あなたには、彼女のウソがわかつたんですね。なぜわかりました？」

「齋木さん……？」

かすれた声でわたしは言った。

齋木さんは、無言で静かな笑みをわたしに向けた。

「なぜなら、私が殺したからです。私はアサミちゃんを送ったあと、すぐに門田を呼び出しました。動機は、先程リサが言ったとおりです。どうしてもこの男を許すことができなかった。そこでこの公園に呼び出し……」

「な、な、何のことなんだ？」

狼狽した店長の声を遮ったのは、荒巻刑事だった。

「ストップ。もうよろしいです。以前の事件でも、あなた方にはしてやられましたからなあ。こちらでも学習しとるんですよ。犯人は、店長さんではない。リサさんでもない。そして、あなた、齋木さんでもない。今回の事件は（アヴァロン）に關係がないのかと思っていました。が、残念ながら、そうではなかった」

そう言つて、荒巻刑事はわたしたちを見回した。

「門田仁史氏を殺した真犯人は、あなたですな。アサミさん」

荒巻刑事は、丸顔をわたしに向けた。

全員が息を飲む気配があつた。

こんな瞬間に、またもや野良猫の間の抜けた声が聞こえてきた。

「アサミちゃん……！」

シンスケ君が泣きそうな声を上げた。

「正確には、あなたとあなたのお兄さん……いや、戸籍上はまだ『女性』のままだから、『お姉さん』と呼びましょうか。お二人の犯行ですな。門田氏の前の奥さんとのあいだの子ども、それがあなた方ごきょうだいなんですね」

わたしは大きく息を吸つた。やや湿つた匂いがした。これから雨が降り出すかもしれない。

荒巻刑事は続けた。

「いやあ、すっかり惑わされるどころでした。なにせ、私自身が、あなたの……えー、お姉さんのご自宅に聞き込みに伺つたんですからなあ。私とここにいる糸居刑事が会つたとき、あなたのお姉さんは、見事に『男』だった。そうだったねえ、糸居君」

「は、は、はあ、そ、そうでした……」

それまで黙っていた糸居刑事は、まだ事情が飲み込めていない様子だった。

「あなたをたびたび指名していた『原田』という人物、それは、他ならぬあなたのお姉さんだった。本名、嵯峨野理恵、通名、嵯峨野俊作さんは、あの夜もあなたを指名した。『決行』するための、アリバイ工作ですな。それまでに何度か指名したのも、まさにこのための準備だった。あなたのお姉さんは……所謂『性同一性障碍』

という方ですね」

『『障碍』じゃない。たまたま、心と体がバラバラに生まれてきただけです』

はじめてわたしは声を上げた。

「あなた方ごきょうだいのことを、どう評していいか……私にはわからんです。いったい、どれだけ強い強い殺意があつたのか。憎悪があつたのか。実の父を殺すために、あなた自身が風俗嬢として……つまり、門田氏と……」

「もういいでしょう、刑事さん」

齋木さんの声は震えていた。わたしは齋木さんの悲しそうな顔を見つめると、頭を下げた。

「ごめんなさい。齋木さんを利用することを考えついたのは、わたしです。巻き込んでしまつて、ほんとうにごめんなさい」

「アサミちゃん……」

「齋木さんだけじゃない。リサさんも、シンスケ君も、ミサトも、みんな利用して、ごめんなさい」

わたしは頭を下げた。それで許されるようなことではないと痛いほどわかつていたけれど。

わたしと姉がこの街に来たのは、父親——吐き気がする言葉だ——である門田仁史がこの街に移住して、新たにデリヘルを開業するという業界内の噂話を聞いたからだ。

このときに、わたしは覚悟を決めた。姉は最後の最後まで止めようとした。しかし、いったい誰が門田仁史という人間を許すことができるだろうか。

まだ生理も始まつていない実の娘の部屋に深夜に現れ、その体を弄んだ男のことを。

わたしは、まだマシだった。姉にとつては、もつともつとむごい仕打ちだった。

「体が女で心が男」ということに気づき始め、悩み始めた小学五年の姉の気持ち、門田仁史という男は理解できなかった。

——お父さんは、おまえを女にしてあげるんだよ。

ベッドの中でそう言ったという。

母が離婚するまで——姉が高校一年、わたしが中学二年——まで、週に一度か二度は必ず門田はわたしたちの体をおもちゃにした。

母もその事実に気づいていたはずだ。気づかないはずがない。

が、母は姉とわたしを連れて逃げ出した。そのとき、すでに門田には数人の愛人がいた。だから、そのどす黒くゆがんだ欲望を満たす手段に不足はなかったはずだ。その証拠に、母との離婚は簡単に済んだ。

わたしたち家族は、関西のとある街で暮らし始めた。

しかしそれから三年とたたないうちに、母が亡くなった……自殺だった。ドアノブにタオルを巻いて、そこに首を突っ込んで、座り込むような格好で息絶えていた。遺体を発見したのはわたしだった。口から延びる舌の灰色と、床に広がる排泄物の匂いは今でもはつきりと脳裏に刻まれている。

今にして思えば、その瞬間だ。門田仁史への殺意を明確に覚えたのは。

姉は高校を卒業後、小さな印刷会社の事務として働いていた——女として。そのこと自体、姉にとっては大きな苦しみだったろう。けれど、生活費と高校へ通うわたしの学費を稼ぐために、姉は必死になって働いた。

わたしも中学三年の頃から、いわゆる「援助交際」で生活費を稼いでいた。が、それが姉にばれたとき、姉は厳しくわたしを叱りつけた。姉もわたしも、もう子どもじゃない。門田仁史という男がどんなことをしてお金を稼いでいたのかを、よく理解していた。

門田と同類の人間に成り下がることに、姉は激しく怒り、生まれてはじめて姉に拳で顔を殴られた。

わたしは姉に甘えすぎていた。

ある日、姉の心は、壊れた。

わたしは高校二年の秋に中退した。年齢を偽り、店舗型ヘルスで働き始めた。すると、業界のいろいろな情報が耳に否応なく入ってきた……門田仁史が経営する風俗店チェーンの情報も。

その頃には、わたしの頭には、門田仁史に復讐することしかなかった。

この地方に門田仁史が新たにデリヘルをオープンする、ということを知りつけた。すでにそのときにはすべての計画ができあがっていた。姉は嫌がったが、計画のため、あえてわたしたちは別々に暮らすようにした。

わたしは隣の市の〈ミルキー・ハウス〉で働き始めた。門田が「常連」として引き抜きを謀っている、という業界の噂を聞いたからだ。しかし、わたしは〈ミルキー・ハウス〉で門田と会うことはなかった。

そして、この街に来た。わたしは〈アヴァロン〉の女になった。そしてようやく、わたしの計画通り、門田仁史は網にかかった。

わたしは、門田仁史——わたしの実の父親——に抱かれた。「聖水プレイ」と称して、自らの父親の前で股を開いて放尿することさえした。

が、門田はわたしが嗟峨野麻美だと気づかなかった。門田がその後、わたしを指名することもなかった。かつて何度も自宅で犯した実の娘であることに気づかなかったのだ。

わたしは、計画を変更した。

幸か不幸か、門田はミサトがお気に入りだった。だから、ミサトから相談を受けたとき、門田仁史の携帯電話の番号を聞き出した。

あとは、リサさんと同じ方法を使って、今の門田仁史がどこに住んでどんな生活をしているのかを調べた。

姉は、「原田」というわたしの「馴染み客」になった。姉の心身の状態ではホテルに行けないので、やむなく「自宅派遣」という形にせざるを得なかった。「ホテル派遣」なら、姉の正体を完全に隠蔽することができたのだが。

そして、その夜、わたしは「原田」という男……姉によって「指名」され、斎木さんの運転で姉のマンションへ向かった。

ミサトが帰った時刻を見計らい、門田仁史に近所の公衆電話からコールした。本名を名乗って。そして、この〈いずみ台公園〉のまさにこの場所に呼び出した。姉のマンションに近く、「原田」との百二十分コースのあいだに行き来できて、人けのない場所はこころしかったのだ。

わたしは、前日にホームセンターで買っておいた万能包丁をバッグに入れて、公

園に向かおうとした。

しかし、予想しないことが起こった。

姉が、自ら行くと言い出したのだ。

わたしは、負けた。

姉がここまで父親に——門田仁史に、激しい憎悪を抱いて今まで生きていたことに気づかなかった。男の心を持って生まれた姉を犯した父親に対する壮絶な怒りと憎しみを。

姉は包丁を持って出かけ、そして、わたしは姉のマンションで待った。

約四年ぶりに現れた娘を見ても、門田はまったく気づかなかったという。それも無理はない。姉は男の姿をしているから。

いつもベッドで布団をかぶって丸くなって、動きたくても動けない姉に、いったいどんな力が隠れていたのだろう。素早く門田仁史の背後に回り込んだ。右手で口を押さえた。包丁を握った左手——一気に門田仁史の喉を掻き切った。

「どうして言ってくれなかったのよ！」

シンスケ君が泣き崩れた。何度も何度もレンガの敷き詰められた遊歩道を拳で殴りつけていた。

わたしは一步前に出て、荒巻刑事に向かって両手を差し出した。

「わたしが、門田仁史を殺しました。逮捕されるのが、刑事さんみたいな人でよかったです……」

「残念というべきか何というべきか……法的にはまだあなたを逮捕できない。とりあえず任意で署まで来ていただきましょうか」

「刑事さん、いつ、わたしが怪しいと思っただんですか？」

わたしの問いに、荒巻刑事は恥ずかしげに髪の毛の薄い頭を掻いた。

「信じてもらえないかもしれませんがねえ、あなたにはじめて会った取調室なんですわ」

「えっ？」

「ねえ、嵯峨野麻美さん。ふつう、風俗嬢の『源氏名』は、本名とは違うものを付

けるんじゃないですかね。私に、深層心理はわかりませんよ。しかし、本物の自身と、風俗嬢である女の子は、べつの人格だと自身に言い聞かせるため……異なる名を付けると思うんです。ところがあなたは違った。本名と同じ『アサミ』という源氏名だ。そのとき、思っただんですわ。もしかしてこの子は、自分が『嵯峨野麻美』だと誰かに知ってもらいたいんじゃないか、と」

わたしは無言でうなずいた。

〈ヘアアロン〉のみんなのほうを振り返った。みなが一様に——あの店長さえ——潤んだ眼でわたしを見ていた。シンスケ君とミサトは泣きじゃくっていた。

唐突に、携帯電話を手にした糸居刑事が、裏返った声で割り込んできた。

「い、今、港西署から連絡がありまして、嵯峨野俊作——いや、嵯峨野理恵が、門田仁史殺害事件について、出頭してきたそうです！」

荒巻刑事は大きく息を吐いた。

「このドアホ！」

リサさんが吐き捨てるように怒鳴った。誰に対しての言葉なのかわからなかった。けれど、その言葉は、わたしの胸になぜか温かくぶつかってきた。

生まれてはじめて姉以外に大切だと思える人たちが、眼の前にいた。

そんな大切な家族みんなに頭を下げた。

「流れる血」完